新潟の水辺だより
niigata-mizubenokai report
Vol.96
●編集発行
特定非営利活動法人
新潟水辺の会
●発行日
2020年05月31日

report 01

C.W. ニコルさんの遺したメッセージ

C.W. ニコル氏が 2020 年 4 月 3 日に直腸がんにより亡くなられました。心よりご冥福をお祈りします。ニコル氏は長く当会顧問をつとめていただきました。ニコル氏と交流の深かった方々からのメッセージを紹介します。

■ C.W. ニコルさんを偲ぶ

C.W. ニコル氏が 2020 年 4 月 3 日に逝去された。

この 4 月 4 日に「C.W. ニコル・アファンの森財団」主催で、昨年の千曲川水害の被災者を元気づけるシンポジウムが開催予定であったが、永遠に開かれことはなくなった。

ニコルとの挨拶はハグが常であったが、「ニコルは大木だな!」と感じていた。その巨樹が倒れてしまった。あと 10 年は生きていて欲しかったが、その巨樹の庇護にあったものが今後は新しい光を受けて大きく育つことを期待する。

ニコルとの最初の出会いは 1989 年 5 月の郡上八幡での長良川シンポジウムであったが、すぐに川について意気投合した。同年 11 月 18 日、「新潟の水辺を考える会」の第 3 回シンポジウムの基調講演をニコルにお願いした。そのポスターの似顔絵が下図（作画・八木栄子）である。右からニコル、新潟向陽高校教諭・荒井六男、信州大学教授・桜井善雄、よこはまかわを考える会・森清和である。豪華な顔ぶれであった。

1997 年 9 月 6 日の第 1 回目佐潟ハス取り大会にもニコルの登場をお願いした（写真参照）。これは、佐潟が 1996 年ラムサール条約登録湿地となり、自然保護団体から佐潟と人のかかわりを遮断するよう要請されたが、我々は佐潟は“里潟”であり、人とのかかわりの中で維持されてきたことを主張した。それを援護してもらうため、ニコルの虎の威を借りたわけである。ニコルからはアファンの森と同じように、自然と人がかかわる大切さを教えられたのである。

顧問　大熊　孝

■ご苦労様ニコル

33 年前の 5 月、飯綱山の子どもを対象とした「ロッジピノキオ」に喜多郎のシンセサイザーが響き、馬上の花嫁を園原比呂史がエスコート。結婚式のメインデッシュは、ニック親子が昨日から焼く一匹の羊である。彼は太地町から黒姫に移り住み、私の活動である子どもの雪上活動の手伝いを引き受けてくれた。得意の歌とギターを駆使してウサギ料理を作り、鯨や海外での冒険の話で子どもたちに夢を与えてくれた。黒姫山（佐渡山）ブナの林伐採反対運動が野尻湖でスタートし、彼は「拝啓林野庁殿」と朝日新聞を通じ、公開質問状を出した。売れない小説家で苦労をしていたが、一躍時の人となった。我が国の自然志向の黎明期に彼は強烈なインパクトを与えた。アウトドアーブームを通じて全国的なログキャビンの到来を迎えた。

彼は自然保護活動に身を投じ、永年の夢であった日本に帰化し、水辺の会支援の日本海カヌー横断支援スタッフとして参画し、喜多郎と共に新潟に赴き、大熊会長とも懇意になり、顧問としても活躍してくれた。鳥居川に NPO 法人を立ち上げ、道産子二頭を飼育し、私財を投じて広大な原野で活き続けている。

彼の遺産は、戦後の日本の自然運動への関わり方、日本独特の自然観やライフスタイルへの影響であり、地球規模の宇宙・自然観へのいざないと言える。

ウエールズ出身の大柄でナイーブな真面目過ぎる赤鬼君はこれからも天空を駆け巡り活躍することを切望したい。

顧問　土方　幹夫

■ケルト系日本人・ニコルのこと

かつてスイス時代に、同僚 2 人と出張で日本に行くことになった。同僚の 1 人がカナダのデイビッドで、ノースウェスト準州のイエローナイフで勤務していたときの上司が日本にいる、出張時に会えないかとの相談があった。誰だと訊いたらニコルだとのこと。今から 30 年も前のことで、これがニコルとの初対面であった。以来、アファンの森には何度も出かけ、ワインを酌み交わした。朝日酒造が創った「こしじ水と緑の会」にも理事として関与してもらった。開発優先だった時代、自然保護の重要性を説いた。あまり声を挙げなかった、いや、挙げてもマスコミが取り上げてくれなかった日本人に代わり、外人として発言し、マスコミも報道してくれた。荒れた放置林を買い取り、健全な森に育て上げた。身をもって伝えたかったからだ。私が初めてアファンの森を訪ねた時とくらべ、木々がずいぶん大きくなり、立派な森になった。ニコルは、100 年後、200 年後のことにも思いを致していた。多様性は可能性だとよく言っていた。彼の存在自体が可能性だったと思う。ニコルは旅立った。しかし、彼の魂はアファンの森だけでなく日本の自然の中に、そして人々の心の中に、ずっと生き続けるだろう。ニコルの薫陶を受けたデイビッドはその後出世し、カナダ政府の野生生物局長も務めた。ニコルの逝去を伝えたら、「彼の謦咳に接することができなくなり、とても残念だ。世界にとっても大きな損失だ」との返事があった。献杯。

会員　金子　与止男

C.W. ニコル氏が 2012 年 3 月に当会が長野県の千曲川支川の鳥居川で実施した鮭稚魚放流を Japan Times に投稿しててくださり金子与止男さんが翻訳してくれた記事が当会 Web サイトに掲載されています。（https://bit.ly/2Wyyzln）

■水辺レポート

■怒る自然の権化のようなニコルさん

和だが大柄な彼が怒ると、真っ赤になるので「赤鬼」と聞いた。最初の出会いは1989年、近自然工法欧州視察ツアー報告会で新潟大学に招き講演してもらった時。

1997年9月佐潟でのハス採り大会でのニコルさん

1996年、ラムサール新潟大会後に、佐潟でのハス採り大会にも参加し、水辺だより43号に寄稿してくれた。ハスの一部は食べられるし、残りは農業肥料にすれば水棲生物の保護になる（抜粋）と利用による循環を提案している。印象に残るのは、通船川ゴミ拾いを予定する私達に、「僕はしない!僕はゴミを捨てる奴を見つけて殴って歩く!」と。彼の真意は『自然は、怒る手も口もない。その代わりに僕が怒ってあげているんだ』。真のナイスガイに合掌!

代表世話人　相楽　治

新潟の水辺だより43号にC.W.ニコル氏「Interfare or Help…‘Hands-On’Conservation（妨げることが手助けすることか… 環境保護の実践）」を寄稿いただいています（https://bit.ly/2ZeoFHz）。また、大熊宏子さんの翻訳は44号に掲載されています（https://bit.ly/3fYPftQ）。

report 02

鳥屋野潟がってんプロジェクト 2019～2020

私たちは、人と水辺との関わりを通して、かつてのような身近な里川、里潟とのいい関係を取り戻そうと、さまざまな取組をしてきました。それがコロナ禍で難しい状況になりました。でも、先達の人々がそうしてきたように、新たな共生の途を探すことができると信じて、地道に取り組んでいきます。いままでより、少し見試しの多い時間になりますが、水辺再生の汗かきを皆さんと楽しみたいと思います。可能な範囲での参加を期待します。

■ 2019年の総括

●潟空芯菜栽培事業：TOTO水環境基金助成

空芯菜の竹筏湖上水耕栽培の3年目は、幸運にも亀田郷土地改良区様から清五郎潟の辺の空き地を借り受けることができ、がってん基地として活用している。2019年は4月末に種まき、苗を育て、5月末に1200株を筏に載せ、6月中旬に刈り取りスタート。運よく、市の施設いくとぴあ食花の直売所や天寿園売店で販売開始し、10月まで毎土日に出荷できた。がってんシェフの佐藤豊さんには、苗育成から直売や料理教室、小学校、FMポートなどで調理実演PRしてもらった。その努力に感謝したい。

学校の中庭に空芯菜ミニ浮島を浮かべ観察

2019年の大きな成果は、なんといっても上所小学校4学年131名の鳥屋野潟総合学習。空芯菜ミニ浮島づくりから観察学習、発表会と驚くべき児童の成長の1年間だ。後日感謝状に、「鳥屋野の水をきれいにする空芯菜はすごいと思いました」、「鳥屋野潟のことをもっと知りたくなりました」とあり、我々も発奮して潟発展に取組みたい。

●浮島環境資源利用
（一財）新潟県建設技術センター助成

鳥屋野潟湖上に、W1 m × L1.5 m × H0.5 mのフロート12個を軽量鉄骨でつないだ浮島に、空芯菜コンテナを設置した。栽培実験や漁礁効果、水質改善効果、浮島活用などを、中学生や大学生と「協働研究」した。予想通り、水鳥の糞害の後始末に追われることになった。山潟中科学部員は、清五郎一本松と浮島での水質

調査に、徒歩と竹筏で渡り、湖上ウォークを楽しんだ。その成果を翌２月の「鳥屋野潟の恵みを考え食する会」で発表した。新潟大農学部４年生の松能美緒さんは、卒論研究で空芯菜のひげ根周辺の生物生態環境を調査した。空芯菜とその他の比較考察で、空芯菜竹筏下の環境が、スジエビや稚魚などに住みやすいことを論文にまとめ、成果をチームに提供してくれた。両者に感謝したい。

湖上の浮島までは 50 ～ 70 ㎝水深で歩いて渡れる

■湖上活用実験ワークショップ
（公財）山口育英奨学会助成

潟の自然を生き物の視点からだけでなく、地形的空間的な特性を、エジソンメガホンで中学生自ら再発見する実験を行った。直径 75 ㎝長さ２ｍの厚手のボール紙製のメガホンを８個つくり、清五郎一本松と対岸湖岸広場と 600 ｍを肉声で通信するワークショップ。現地で東新中美術部と山潟中科学部の生徒が荒川洋子先生の指導でアートワークショップもした。メガホン通信は湖上の浮島で歌声実験をお願いした森本世話人のシグマ・バンドⅡも加わり、３点をつなぐエジソンメガホン応答実験は成功した。今後はさらに活用進化を図りたい。

照準をうまく合わせれば 1km 声が届くという

■ 2020 年のがってんプロジェクトの活動

●潟空芯菜栽培事業：TOTO 水環境基金助成

鳥屋野潟で水耕栽培する空芯菜のキャッチコピーは「空芯菜を食べれば食べるほど身体も潟も元気になる」だ。でも空芯菜の知名度はまだまだ。空芯菜の健康食品力、料理しやすさ、夏野菜などでアピールしたい。この夏には、①食材で要望のある学校や子ども食堂、地域の茶の間などに提供、②空芯菜うどんなど加工品での普及、③トマトなど水耕栽培品種の研究にトライしたい。また、空芯菜の収穫で、市民や子供たちに安全に潟中に入ってもらえるように、竹筏の周りに木道を整備中だ。

●鳥屋野潟両岸をつなぐ防災・環境舟運の親子体験会：（一財）新潟県建設技術センター助成

昨秋の台風水害を見て、鳥屋野潟の防災ウォーク体験での活用法を考えた。濁りで足元の見えない潟中を歩き、舟や筏に乗ってヒト・モノ、情報を対岸に運び、環境を学ぶ、湖上防災体験会を夏に予定している。平時での台風災害への対応力を引き出せたらと思う。

準備体験会と潟渡りの親子体験会の２回を予定している。

【両岸をつなぐ防災舟運イメージ】

●青少年が人力で走らせる、浮島がってん丸
（公財）日本フィランソロピー協会（ゆうちょエコ・コミュニケーション）寄付事業

人力で走らせる「浮島がってん丸」（イメージ）

潟の環境を眺めたり、生き物の種類を学ぶ環境学習だけでなく、潟の真ん中に人力で漕ぎ出し、五感で環境を学ぶ、アクティブラーニングを若者チームでトライしてもらう予定。パドル漕ぎと自転車ペダルこぎスクリューと帆の力で浮島がってん丸を動かす。運航プログラムや湖上表現ワークショップ、湖上キャンプなどを通して、鳥屋野潟の湖上環境資源の活用と環境体験学習の持続可能性を掘り起こせたらと思う。

代表世話人　相楽　治

■水辺レポート

つうくり沿川まちづくりの会　活動の様子
新潟県立大学生による 通船川ちぇあ～ず 乾杯編

1. はじめに

前回（95 号）では、つうくり沿川まちづくりの会の発足からの経緯と、2019 年に実施した通船川チェア～ズ作ろう編を記述しました。今回は、各自が作成した椅子を持ち寄り通船川の「お好みスポット」探しに挑戦の様子を報告します。

前回同様に県大生が主体に取り組み、事業を企画し募集し、運営を行うもので、当会は助言と費用管理を行い地域の方々と一緒に参加して、川への関心と通船川・栗ノ木川の周知・防災意識の向上を図ります。

これらの河川は、県の新潟振興局地域整備部が管理しており河川への関心度や疑問対応等どのようなものか関心を持っており、随時参加されています。

(この活動は新潟市地域活動補助金にて実施)

2. ちぇあ～ず 乾杯編

実施日時：2019 年 10 月 20 日（日）14：00 ～ 16：00

会場場所：新松崎第 2 公園

当日は秋晴れのもと、親子 7 組、15 名の参加者で、にぎやかに開催されました。

学生たちは、2 時間前に集合して、ミーテング、リハーサルまでやって、手抜かりの無いように万全の準備を尽くしたようです。私が 30 分前に現地に合流した時には、暑さもあってか、皆さんは少々バテ気味でした。しかし 20 分前頃から参加者が集まりだすと、すぐに元気を取り戻し、ニコニコ顔で受け付け対応をしており、さすが若さがあると感心しました。

県大生の主催者挨拶、緊張の瞬間

開会から閉会まで学生が主体的に実施しており、作ろう編からは、かなり慣れた言葉と動きでした。

開会の挨拶、主旨説明、本日の流れと注意事項などをして、全員でジュースにて乾杯をしてから、進行表にそって進められました。

つうくりの会員である佐藤泰雄さんからの通船川や地域の経緯、生き物、地域防災などのミニ講座があり、その後、各自が椅子を持って堤防上の歩道を思い思いのスポット探しに出発しました。

各自が椅子を持ってお気に入りの場所探し

お気に入り場所を探し当てた後は、大きな平面図に自分のお気に入り場所を記入し、決定した理由を述べるのです。まさに十人十色でした。きっと皆さんは、他人と同じ場所にしたくないという心理が働いたようです。傾向としては、多くに方が「かわせみ橋」が見える場所を選んでいました。

各自がお好みの場所記入し理由を発表

3. まとめ

県大生は、初めての挑戦であり何とか地域の役に立てればとの想いで取り組んでいました。終了後の意見交換では、山の下閘門通過やカヌー体験要望が多く寄せられました。これらの結果は、今後の「つうくり会」の活動に求められていると感じました。

今年度の県大生との活動は開始したのですが、新型コロナウイルス問題から中断したままであり、このまま中止せざるを得ない状況かと思っています。

副代表世話人　山岸　俊男

report 04

新川開削の映像化

■多くの人に、新川の魅力を伝えたい

全国有数の西蒲原の美田が、現在の姿になったのは文政3（1820）年「新川」が、掘割されたことに始まります。そして、今年は開削200年の節目の年にあたります。

西川と新川の立体交差などの近代土木遺産と、新川の歴史およびその流域で育まれた文化について理解を深め、その環境保全につとめながら、周辺地域のまちおこしに寄与することを目的に、2007年、越後新川まちおこしの会が発足しました。それから早くも13年です。

この新川開削の始まった文政元年（1818）7月、東海道中膝栗毛で当時の流行作家となった十返舎一九が内野に来て、越後･内野の大工事の様子を「内野砂山堀割之図」として描き、江戸の人々に紹介しています。

これをヒントにして、十返舎一九と弥次さん喜多さんが「200年前のかの世」から新川開削200年を迎えた内野に降り立ち、私たちに実況報告する「新川開削ものがたり」の脚本を作り、漫画を高橋郁丸さんに描いていただき、西区宝サポート事業の助成を受けて映像化しました。

十返舎一九が弥次さん喜多さんと一緒に新川開削を訪ねる

この映像で皆さんにお見せしたかったのは、普段見ることのできない、西川と新川の立体交差上空からの眺めです。そして、新川の歴史と文化、技術と長岡領願人の共助です。中でも越後人の発想の素晴らしさです。当時どこにでもあった踏み車を10段にして地下3mの排水問題を解決し、江戸時代最大級の木製底樋（水路トンネル）を埋設する工事技術が越後の農民層にあったことです。この10段にしての排水は国内では他にやっていません。

この映像は、新潟市の全地区事務所、市立図書館及び西区、西蒲区の全小中学校に寄贈しました。新潟市中央図書館や新潟市西区役所地域課にて貸し出しをしていますので、ご利用ください。

また、十返舎一九とたどる「新川開削ものがたり」でYouTubeにアップしましたのでご覧ください。
スマホで右上の2次元バーコードからもご覧いただけます。

新川開削の歴史

越後新川まちおこしの会　加藤　功

report 05

鮭の育成と放流

■宝川の鮭発眼卵の河床埋設放流

新潟水辺の会では、舟が往来し、鮭などの魚類が遡上し、上流で産卵、降下できる「普通の信濃川」にしたいとの思いで大河復活活動を行ってきました。

その中で、鮭の回帰を現在国内で行われている人工ふ化放流だけに頼るのではなく、河川での自然産卵による遡上を目標として、日本海区水産研究所の飯田真也さん指導による鮭発眼卵の河床埋設放流は今年で7年目です。

令和元年12月15日発眼卵河床埋設放流に参加した皆さん

現在まだ長野県での鮭発眼卵の河床埋設放流が出来ませんが、将来千曲川での埋設放流を目指しています。

ここ3年は、弥彦山下の宝川で埋設放流を行い、ふ化率、稚魚の海への降下も思っていた以上に順調でした。3年前に埋設した発眼卵からふ化した稚魚が今年の秋には、大きくなって戻ってくるのではと期待しています。

■長岡市立小国小学校 - 総合学習のお手伝い

5年前、（公財）山口育英奨学会より鮭発眼卵の河床埋設放流の助成を受けました。その報告会で、山口育英会様のある地域の長岡市立小国小学校でも鮭の育成をしており、そのお手伝いを頼まれて4年目となりました。

鮭発眼卵からの育成を通じて、自然界のサイクル、生命の神秘さと大切さを児童たちと一緒に学んでいます。

令和元年12月15日発眼卵河床埋設放流に参加した皆さん

昨年暮れのふ化場見学は、インフルエンザによる学級閉鎖で叶いませんでした。稚魚放流の3月17日は、新型コロナウイルス感染拡大を防ぐため学校は閉鎖中でした。

しかし、担任の小池先生が稚魚放流を呼び掛けた処、4年生18名と6名の父兄、校長先生がマスク姿で集まってくれ、大きくなって戻れと放流を行う事が出来ました。

副代表世話人　加藤　功

■水辺レポート

キガタヤ寄合＃004＜特別回＞　越後平野の暮らしと舟　－つくる・語る・受けつぐ－
－和船の製作とシンポジウム－　10月26日～11月3日　開催報告

昨年5月にスタートした「キガタヤ・プロジェクト」の一環として，水辺の会にも共催いただき，木造和船に関するイベントを行いました。－つくる・語る・受けつぐ－という副題のとおり，新潟市の船大工・中川仲一氏の監修により，アメリカ人船大工・研究者のダグラス・ブルックス氏（製作補助ニーナ・ノア，記録ベンジャミン・ミーダー）が木造和船（ホンリョウセン）を制作。完成後，進水式・舞踊家堀川久子による踊りや試操船の他，昔ながらの船上からふるまいを行うなど厳粛さとにぎやかさのある完成イベントを実施。最終日は場所をキガタヤに移して和船の公開・シンポジウムを開催。県内外から多くの方々がご参加くださいました。

日本のかんなで仕上げをするブルックス氏・ノア氏

ブルックス氏は，船大工によって継承されているユニークな日本の造船技術が，社会の変化・船大工の高齢化により危機に瀕している状況を憂慮し，1994年のたらい舟技術習得をふりだしに，45都道府県で船大工に弟子入りし，精力的に製作技法の記録・公開に努めてきました。新潟との関わりは，映画「阿賀に生きる」。遠藤船大工さんに会いたいと18年前に新潟へ。そのとき旗野秀人さんに見せていただいた図面をもとに，米国・ミドルベリーカレッジで阿賀野川の川船を造る授業を担当。今回は中川さんから越後平野の和船ならではの具体的な技法やコツを直接教わることができて，大変貴重な機会だったとのこと。接着に使用する造船用うるしにかぶれるという強烈なおまけ付きでした。

シンポジウム会場は和船ファンなどでいっぱいに

シンポジウムでは，基調講演として，ブルックス氏が新潟の和船との出会いやその魅力と，風前の灯火ともいえる和船の造船技術を記録したり製作したりすることの重要さ，またそれを閉鎖的に保護するのではなく，世界中にシェアすることが存続につながるという内容を発表。

完成を祝して船のまわりで乾杯！話に花が咲く…

その後のパネルディスカッションで，かつて地図にない湖といわれた越後平野の稲作地帯の農業に欠かすことのできなかった各種田舟や，生活・産業に欠かすことのできなかった川船の特徴を，今回の製作・インタビューの映像やコーディネーターの岩野邦康氏の解説・中川氏の話で概観し，その後，氷見市立博物館の廣瀬直樹氏による富山県の和船の特徴との比較で理解を深めました。

ブルックス氏は米国の伝統的木造船に関する現状や大学での和船制作のワークショップ，米国ポートタウンゼントの木造船フェスティバルの様子の紹介などから，技術の記録・保存とそれをシェアしたり，発信したりすることの必要性を訴えました。参加者との造船技術や特徴に関する質疑応答も含め，越後平野から国内外まで視野が広がり，「つくる」・「語る」活動を通して，過去の記憶・技術，人々の生活文化を収録・保存し，それを広く発信する＝「受けつぐ」こと，それを楽しむことの大切さに気づく機会となりました。

11月2日 小阿賀野川の中川造船にて進水式（中央が中川氏）

完成したホンリョウセンは，米国から来て製作・記録に携わった三人の名前 Douglas, Nina, Benjamin のイニシャルから「DNB丸」と中川氏が命名。今後鳥屋野潟で保存・活用していくことになっています。今後，この舟のための櫂を作り，漕ぎ方を教わるワークショップも企画中です。水辺に親しみながら和船文化を「受けつぐ」ことを楽しんでいきたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

キガタヤ・プロジェクト（新潟水辺の会会員）
荒川　洋子

report 07

新潟の水辺シンポジウム 2019
誰もがいつでも舟遊びを楽しめる水辺に！

2019 年 12 月 14 日（土）新潟駅前の会議室で 35 名の参加のもと本シンポジウムを開催しました。

前半は大熊　孝当会顧問「最近の洪水と水害について」、加藤　功当会副代表「鮭の川復活活動とその後」、山岸　俊男当会副代表「つうくり沿川まちづくりの会 2019」、相楽　治当会代表「鳥屋野潟がってんプロジェクト 2019」の各報告がありました。

後半は相楽代表をコーディネーターに「いつでも楽しめる舟遊びのプラットフォーム実現に向けて」と題してパネルトークを行いました。ここではパネルトークの内容について紹介します。

相楽　治（当会代表）：備品や指導者体制はある程度あるが、それをシェアしながら運営するノウハウや関係する方々の連携が足りないように思う。サービスや物資を提供した団体がその対価としてカヌーなどを使用できるという、多くの人が関り応援できる仕組みを作っていきたい。

澁谷　毅氏（新潟市立万代高等学校端艇部監督）：これまでの部活動で OB の人数も多くなってきた。現役の部員だけではなく OB も一体となった組織を作っていき、指導者の育成や取り組みに若い力を活用できるのではないかと考えている。小さい子はカヌー遊びから始めて、年齢が高くなるに従って競技志向を強めていけるスクールができるとよいと思う。

佐藤　正人氏（越後新川まちおこしの会会長）：2020 年新川は開削 200 周年を迎える。また西川と新川の立体交差というシンボルもある。歴史と先人の苦労を顕彰しようと清掃や川下り、生物調査、踏み車体験などをやっている。200 周年の取り組みでは音楽や女性など多様な方々が関われるようにしていきたい。また、全国には 150 以上の新川があるので新川サミットもやってみたいと思っている。

中村　吉則氏（NPO 法人五泉トゲソの会理事長）：トゲソの保全に取り組みながら、これまでに 17 回早出川清流スクールを開催してきた。市からカヌーを借りたり、指導者が近くにいないなど苦労した。シェアプラットフォームは仕組みとそれを動かすコーディネーターがいなければ難しく、継続していくにはビジネスモデルを確立していく必要がある。

松田　暢夫氏（山潟地区コミュニティ協議会会員）：山潟コミ協では冬の鳥屋野潟を食する会、春夏に山潟朝市、秋にはまち歩きを開催している。イベントの時には大勢がカヌーを楽しんでいるが、そうでないときはひっそりとしている。スポーツ講演と一体となったプラットフォームの実現に取り組んでいただけると、コミ協も関わりやすいと思う。また、スポート公園のカナールとプラットフォームを連動させる仕組みができたら面白いと思う。

大野　彦栄氏（鳥屋野潟漁業協同組合理事）：当組合では刺し網などで魚を獲ることができる人が減っている。魚を獲るだけではなくそうしたことができる人も育てていかなければいけない。また組合は漁よりも漁場の環境保全、水辺利用の取り組みへの協力にシフトしてきている。また、漁をするにもカヌーに乗るにも漕がなければいけない。漕ぐことを通じて鳥屋野潟や潟船のことも学んでほしい。鳥屋野潟に港があり、そこに板合わせやカヌーがあり、いつでも利用でき、ビジネスにつながっていくとよい。

肥田野　正明氏（まちごと美術館 CotoCoto 主宰）：障がい者アートのレンタル事業を始める前にニーズの有無や価格設定についてアンケート調査を行った。カヌーシェアの絵を描いて企業に PR しながら意見を伺うなどしていったらよいと思う。水環境を通じて新潟の魅力を作ることに賛同する企業も多いと思うので、そうしたところへ発信していくとよいと思う。また、イベント時だけではなく毎週何曜日というように水辺に触れられる機会を定期化・常設化できるとよいと思っている。

土方　幹夫（当会顧問・車椅子カヌー普及会）：障がい者も水辺で遊べるようになり、遊びを通じて遊べる環境を残したいと思う。障がいを持つ人も生きる権利がある。かわいそうなどと変な目で見ないで自分たちと一緒だととらえて遊ぶことが大切である。車椅子でカヌーに乗れない子どもを水の上に浮かべると生き生きとした目の輝きや息遣いを感じる。そうした子どもたちにも生きていける力を身につけていてほしいと思う。そうしたことが可能になるには、乗り降りのためのスロープやポンツーンの設置などの環境が必要となる。また、大人が世話を焼き過ぎるのではなく、子ども達が自由に遊び、危ないときには大人が助けるという姿勢も重要である。

まとめ：事務局　杉山　泰彦

書籍「洪水と水害をとらえなおす～自然観の転換と川との共生～」

河川工学の泰斗が、日本人の伝統的な自然観に迫りつつ、今日頻発する水害の実態と今後の治水のあり方について論じ、ローカルな自然に根ざした自然観の再生と川との共生を展望する。大熊河川工学集大成の書。（出版社作成のチラシより）

著者より「私はお陰様で、3 年前の大病を乗り越えて、77 歳の新年を迎えることができました。ありがたいことです。

命を永らえることができたことに感謝して、昨年 8 月の 77 歳の誕生日までに、今考えていることを 1 冊の本にするよう書き上げました。

その後、昨年 10 月の台風 19 号災害が起こり、その水害の特徴などを追記して、農文協プロダクションの田口均さんに原稿を渡し、出版をお願いしました。

それが『洪水と水害をとらえなおす～自然観の転換と川との共生～』という書名で、何とか出版できる運びとなりました。本書は、水害で多くの死者を出すなど、行き詰っている現代治水のあり方を根本的に問いなおし、「越流しても破堤しない堤防」をつくることを提案しています。現代治水が行き詰った理由は、縄文時代から続いていた生業に立脚した「民衆の自然観」が明治以降の近代的科学技術文明による「国家の自然観」によって消滅させられたことにあり、今後はそれに代わるものとして「都市の自然観」をつくり上げる必要があることを提案しています。」

書名：「洪水と水害をとらえなおす～自然観の転換と川との共生～」
著者：大熊　孝（新潟大学名誉教授、当会顧問）
出版：（株）農文協プロダクション
発売日：2020 年 5 月 29 日
定価：本体 2,970 円（税込み）
書店・農文協のネットショップ「田舎の本屋さん」などでお求めください。
※在庫切れとなっていた「河川工学者三代は川をどう見てきたのか　安藝皎一、高橋裕、大熊孝と近代河川行政一五〇年（篠原　修著）」の増刷が決定しました。ご注文は農文協プロダクション（http://nbkpro.jp/）のお問い合わせからお願いします。

■大熊 孝顧問 NHK BS プレミアム「英雄たちの選択」出演のご報告

磯田道史氏が主宰する NHKBS プレミアムの「英雄たちの選択」の『水害と闘った男たち～治水三傑』（3 月 11 日放送）に大熊顧問が出演しました。大熊顧問は、武田信玄や津田永忠が地形や地質を見抜いて治水を展開していたことを強調するとともに、霞堤は洪水時に魚の避難場所となることや、洪水の氾濫で置いて行かれる泥は肥料となり、「花泥」と呼ばれていたことなどを紹介し、最後に今後の治水のあり方として「越流しても破堤しない堤防」を主張しました。（再放送が 7 月 1 日（水）20:00 ～ 20:59、7 月 8 日（水）8:00 ～ 8:59 にあります。）

編集後記：　C.W. ニコルさんのお名前を初めて聞いたのは 1976 年でした。1975 年から 76 年にかけて沖縄海洋博覧会が開催され、ニコルさんはカナダ館の副館長、後に私の義理の兄になるカナダ人のウイルフ・ウェックリーはカナダ館のコンパニオン?（男性です）をしていました。

イタリア館のコンパニオンをしていた私の姉はその後、ウイルフと結婚し、「アファンの森」に泊まりに行くなど 40 年以上、親しくおつきあいしていました。

ニコルさんはすごく穏やかな印象で 1997 年の第 1 回目佐潟ハス採り大会では新潟駅まで迎えに行った事が懐かしく思い出されます。

最後にニコルさんに会ったのは 2014 年 11 月 28 日、東京・六本木ヒルズでの私の甥っ子の結婚式でした。二次会まで付き合ってくれたニコルさんはちょっと疲れた様子だったのが印象的でした。

姉の話によるとお酒の飲みっぷりも豪快だったとの事。日本 (人) に大きな影響を与え、スケールの大きな人生を過ごしたニコルさんのご冥福をお祈りします。

編集人：森本　利

●発行：特定非営利活動法人新潟水辺の会
●事務局　〒 950-2264　新潟市西区みずき野 4-7-15　大熊河川研究室内
Phone　025-264-3191（留守番電話の際は伝言をお願いします。）
●ホームページ　https://niigata-mizubenokai.org　●メール　info@niigata-mizubenokai.org
●会員数　個人会員 91 名、法人会員 5 団体、家族会員 6 組、賛助会員 7 名、顧問3名（2020 年 5 月 31 日現在）